



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	高校生の性意識と個人および学校レベル要因との関連性について
Author(s)	高倉, 実; 小林, 稔
Citation	琉球大学教育学部紀要(76): 241-247
Issue Date	2010-02
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/16491
Rights	

高校生の性意識と個人および学校レベル要因との関連性について

高倉 実¹, 小林 稔²

The individual- and school-level factors related to the perception of sexual behaviors among high school students

Minoru Takakura¹ and Minoru Kobayashi²

Abstract

This study determined the effects of individual-level as well as school-level factors on adolescents' perception of sexual behaviors in order to understand the implementation challenge of sexual education in high schools. The survey was conducted at 30 high schools throughout Okinawa, Japan, which included questionnaires for students, teachers, and schools. Self-administered questionnaires were distributed to 1,144 students in grade 11th and 1,555 teachers. A survey of the school regarding sexual education was mainly answered by the vice-principals of the schools. The questions concerning a normative consciousness and an intention on sexual behaviors, and an attitude on AIDS were analyzed. Logistic regression models showed that the normative consciousness was associated with self-esteem and alcohol drinking in boys. In girls, the normative consciousness was associated with talking with parents, alcohol consumption, and attending school in which many teachers consider that sexual education should be conducted by all staff. Sexual intent was related to alcohol consumption in boys, and talking with parents in girls. An attitude on AIDS was related to alcohol consumption and being comfortable at home in boys; and living with both parents, being comfortable at home, and attending school in which many teachers consider that sexual education is very important in girls. This study suggests that students' perception of sexual behaviors is more likely to be influenced by individual-level factors compared with school-level factors.

はじめに

わが国では、10代から20代の性感染症の罹患率が他の年齢層のそれに比して高く、同様に若者のHIV/AIDS報告者数が年々、増加する傾向にあり、きわめて深刻な問題となっている^{1, 2)}。また未成年の人工妊娠中絶実施率は、平成14年以降は

減少しているものの、まだ予断が許されない状況にある³⁾。若者の性感染症や望まない妊娠を予防するためには、まず、性的接触を避けること、すなわち、性交経験を遅らせること、そして、性交経験者には、性感染症や望まない妊娠を避ける安全な性行動をとらせることがきわめて重要な方策となる。学校における性教育は「人格の完成と豊

¹ 琉球大学医学部 (Faculty of Medicine, University of the Ryukyus)

² 琉球大学教育学部 (Faculty of Education, University of the Ryukyus)

かな人間形成、意志決定の能力を身に付け、望ましい行動を取れるようにすること」が第一義的な目的であるが⁴⁾、公衆衛生的観点からみれば、学校においても、初交年齢の遅延および安全な性行動への行動変容をターゲットとした予防的取り組みが望まれる。そして、効果的な予防的取り組みを考える際に、高校生の性行動の実態および関連要因について明らかにしておくことが必要となる。

本調査は、沖縄県全域の高校生の性に関する意識について調査したものである。調査内容の中には性交経験をはじめとする性行動について直接、質問した調査項目が含まれないことから、性行動の変容を目標とした性教育を考える際に不可欠な高校生の性行動や関連要因の実態について明確にすることが出来ない。したがって、隔靴搔痒の感を免れないが、性行動を予測する変数として、性に対する規範・態度に関する意識項目を用いた。これまでの研究により⁵⁾、これらの項目は若者の性行動を決定することが明らかにされている。

本分析では、高校生の性意識と個人的要因との関連性を検討することによって、性教育を実施する上で考慮しなければならない問題を明らかにした。さらに、学校における性教育の実施状況や教員の意識分布からみた集団レベルの学校要因と高校生の性意識との関連性を検討することによって、学校における性教育に対する取り組みが個々の生徒の性意識に関係しているか否かを推定した。

方法

本分析では生徒調査、学校調査、教員調査のデータを用いた。分析対象は沖縄県全域の高校から選定された30校（全日制27校、定時制3校）の2学年1クラスに在籍する生徒1,144名のうち質問紙調査に回答した925名（男子459名、女子435名、不明31名、回収率80.9%）である。対象教員は同校の教員1,555名のうち質問紙調査に回答した889名（男性490名、女性393名、不明6名、回収率57.2%）である。また、学校調査は主に各校の教頭が回答した。生徒調査については東京都性教育研究会の実態調査項目⁶⁾を、学校および教員調査については群馬県教育委員会の調査項目⁷⁾を参考にした。

調査項目の中から、高校生の性に対する規範・態度に関する意識項目として以下の3項目を適用した。まず、規範意識に関する項目として、「あなたは、高校生が性交することについて、どう思いますか」と質問し、「高校生までしない方がよい」あるいは「結婚するまでしない方がよい」と回答した者とそれ以外の2群に分け、前者を規範意識あり群とした。性交意図に関する項目として、「あなたは、親しくしている人に性交を求められたら、どうしますか」と質問し、「よく話し合い性交しない」あるいは「絶対拒否する」と回答した者とそれ以外の2群に分け、前者を性交しない群とした。エイズに対する態度項目として、「あなたは、エイズなどの性感染症についてどのように考えますか」と質問し、「自分にも感染する可能性があるので気をつける」と回答した者とそれ以外の2群に分け、前者をエイズに気をつける群とした。

性意識に関連すると考えられる個人的要因として、両親との同居、家の居心地（楽しい）、家で話す頻度、相談友達の有無、携帯メールの利用、出会い系サイトの利用、自己肯定感（自分が好き）、喫煙経験、飲酒経験を用いた。学校要因として、性教育として単独の年間計画の有無、昨年の校内研修会の有無、保護者への説明の有無、小集団（個別）指導の有無、昨年の外部講師による指導の有無を用いた。また、性教育の実施時間として、各教科や他の機会で開催した時間の合計を求め、中央値（8時間）により2群に分けた。教員要因として、現任校1年目の教員割合（全体割合35.3%）、性教育はとても重要と思う教員割合（全体割合81.3%）、性教育は全職員で指導にあたると捉えている教員割合（全体割合64.4%）、昨年の研修会に参加した教員割合（全体割合14.7%）、性について家庭で教えるべきと思う教員割合（全体割合89.2%）、昨年の性教育を自分で実施した教員割合（全体割合24.1%）を用いた。これらは全体割合を境にして多少の2群に分けた。

関連性の分析には χ^2 検定を用いた。性意識および個人的要因の割合の多くに性差がみられたために、男女別に分析した。次に、単変量解析で有意な関連が認められた要因を独立変数、各性意識項目を従属変数とした多重ロジスティック回帰分

表1 高校生の性意識と個人的要因との関連（各要因別にみた性意識の割合）

		男子						女子							
		規範意識		性交意図		エイズ態度		規範意識		性交意図		エイズ態度			
		結婚するまでしない	p	求められても性交しない	p	気をつける	p	結婚するまでしない	p	求められても性交しない	p	気をつける	p		
全体	n (%)		n (%)		n (%)		n (%)		n (%)		n (%)		n (%)		
		102 (23.3)		89 (20.0)		256 (60.1)		114 (28.6)		192 (47.6)		215 (52.8)			
両親	同居	69 (23.4)	0.972	62 (20.4)	0.760	175 (60.6)	0.778	88 (30.1)	0.274	144 (48.5)	0.571	168 (58.1)	0.001		
	その他	33 (23.2)		27 (19.1)		81 (59.1)		26 (24.5)		48 (45.3)		47 (39.8)			
家の居心地	楽しい	63 (24.0)	0.215	59 (21.8)	0.737	168 (64.9)	0.011	77 (31.0)	0.025	131 (52.0)	0.009	151 (59.4)	0.039		
	楽しくない	8 (21.1)		7 (18.9)		16 (41.0)		7 (21.9)		8 (24.2)		19 (55.9)			
	どちらとも	20 (16.1)		23 (18.5)		71 (56.8)		17 (17.2)		53 (52.5)		45 (44.6)			
家で話す	よく	33 (41.8)	0.000	18 (22.2)	0.660	39 (63.9)	0.732	62 (41.6)	0.000	82 (53.9)	0.019	80 (58.0)	0.278		
	時々	32 (17.7)		33 (18.0)		112 (60.5)		34 (21.3)		78 (48.1)		89 (53.0)			
	話さない	36 (20.5)		38 (21.1)		105 (58.3)		17 (19.5)		31 (35.2)		46 (47.4)			
相談友達	同性	48 (21.6)	0.514	48 (21.4)	0.849	135 (61.6)	0.659	74 (29.6)	0.256	130 (51.2)	0.112	138 (53.7)	0.458		
	異性	17 (18.1)		20 (20.6)		57 (61.3)		19 (20.7)		46 (48.4)		54 (56.8)			
	いない	27 (24.8)		21 (18.8)		64 (56.6)		12 (26.7)		15 (34.1)		23 (46.0)			
携帯メール	毎日	55 (22.4)	0.489	45 (18.0)	0.432	135 (58.4)	0.257	76 (26.4)	0.217	143 (48.8)	0.163	158 (55.2)	0.132		
	その他	38 (25.5)		32 (21.2)		97 (64.2)		31 (33.0)		39 (40.6)		48 (46.6)			
出会い系	利用しない	72 (19.6)	0.425	79 (21.1)	0.438	225 (60.5)	0.915	96 (26.7)	0.346	184 (50.4)	0.041	203 (54.9)	0.209		
	利用した	7 (25.9)		4 (14.8)		16 (61.5)		3 (16.7)		5 (26.3)		10 (41.7)			
自己肯定	好き	41 (42.7)	0.000	23 (23.2)	0.568	58 (64.4)	0.458	27 (45.0)	0.007	25 (41.7)	0.109	31 (60.8)	0.154		
	嫌い	6 (10.7)		9 (16.1)		37 (63.8)		20 (22.5)		36 (40.4)		42 (45.2)			
	どちらとも	47 (17.0)		57 (20.4)		160 (58.0)		66 (26.6)		131 (51.8)		142 (54.4)			
喫煙経験	吸わない	73 (26.2)	0.001	65 (23.0)	0.069	164 (59.4)	0.759	90 (28.4)	0.536	162 (50.8)	0.230	177 (54.6)	0.714		
	吸った	17 (11.8)		23 (15.5)		89 (61.0)		16 (24.6)		30 (42.9)		36 (57.1)			
飲酒経験	飲まない	50 (29.9)	0.010	51 (30.4)	0.000	82 (49.7)	0.000	56 (37.3)	0.003	81 (54.4)	0.040	83 (53.5)	0.000		
	飲んだ	50 (19.1)		38 (14.1)		170 (67.2)		56 (23.3)		108 (43.7)		129 (52.9)			

下線は $p<0.05$

析を行い、各性意識と独立に関連する要因の抽出を試みた。その際、回答分布の偏りやオッズ比の解釈を容易にすることを考慮して、変数のカテゴリ数が3以上の場合は2値変数に変換し、喫煙経験と飲酒経験については多重共線性を考慮して飲酒経験のみを用いた。有意水準は5%とした。

結果

性意識についての生徒割合は、男子の場合、規範意識あり群が23.3%、求められても性交しない群が20.0%、エイズに気をつける群が60.1%、女子の場合、規範意識あり群が28.6%、求められても性交しない群が47.6%、エイズに気をつける群が52.8%であった（表1）。性交意図およびエイズ態度に性差がみられた。

高校生の性意識と個人的要因との関連について表1に示した。男子の場合、規範意識と家で話す頻度、自己肯定、喫煙経験、飲酒経験との間に、また性交意図と飲酒経験、エイズ態度と家の居心地および飲酒経験との間に有意な関連が認められた。女子の場合、規範意識と家の居心地、家で話

す頻度、自己肯定、飲酒経験との間に、また性交意図と家の居心地、家で話す頻度、出会い系サイトの利用、飲酒経験との間に、さらにエイズ態度と両親との同居、家の居心地、飲酒経験との間に有意な関連がみられた。全体的に生徒割合の傾向をみてみると、両親と同居している者、家の居心地がよい者、家でよく話す者、自分のことが好きな者、飲酒経験のない者に、望ましい性意識を持つ者の割合が多くなっていった。しかし、男子の飲酒経験者にエイズに気をつける者の割合が多くみられた。相談友達の有無と携帯メールの利用はいずれの性意識とも有意な関連を示さなかった ($p>0.05$)。

高校生の性意識と学校要因との関連について表2に示した。女子にのみ、規範意識と校内研修会の有無、外部講師の有無、性教育の実施時間の多少との間に有意な関連が認められた。昨年、校内研修会を実施した学校あるいは外部講師による指導を実施した学校に属する女子生徒は規範意識が高い傾向にあった。しかし、性教育の実施時間が長い学校的女子生徒ほど規範意識が低い傾向が示された。

表2 高校生の性意識と学校要因との関連 (各要因別にみた性意識の割合)

学校要因	男子									女子												
	規範意識			性交意図			エイズ態度			規範意識			性交意図			エイズ態度						
	結増するまでしない	求められても性交しない		求められても性交しない		気をつける		結増するまでしない	求められても性交しない		求められても性交しない		気をつける		結増するまでしない	求められても性交しない		求められても性交しない		気をつける		
n	(%)	p	n	(%)	p	n	(%)	p	n	(%)	p	n	(%)	p	n	(%)	p	n	(%)	p		
単独計画	なし(26校)	88	(23.4)	0.938	78	(20.4)	0.632	214	(58.8)	0.183	104	(30.2)	0.077	169	(48.4)	0.425	185	(52.9)	0.975	185	(52.9)	0.975
	あり(4校)	14	(23.0)		11	(17.7)		42	(67.7)		10	(18.5)		23	(42.6)		30	(52.6)				
研修会	なし(15校)	39	(20.2)	0.168	37	(19.1)	0.667	117	(59.7)	0.876	44	(21.0)	0.000	100	(47.8)	0.932	118	(51.8)	0.625	118	(51.8)	0.625
	あり(15校)	63	(25.8)		52	(20.7)		139	(60.4)		70	(37.2)		92	(47.4)		97	(54.2)				
保護者説明	なし(18校)	59	(25.3)	0.295	49	(20.6)	0.739	129	(58.6)	0.526	68	(28.0)	0.715	107	(44.2)	0.091	131	(53.3)	0.831	131	(53.3)	0.831
	あり(12校)	43	(21.1)		40	(19.3)		127	(61.7)		46	(29.7)		85	(52.8)		84	(52.2)				
個別指導	なし(4校)	11	(27.5)	0.514	11	(27.5)	0.214	21	(51.2)	0.222	11	(27.5)	0.866	16	(40.0)	0.308	25	(48.1)	0.463	25	(48.1)	0.463
	あり(26校)	91	(22.9)		78	(19.3)		235	(61.0)		103	(28.8)		176	(48.5)		190	(53.5)				
外部講師	なし(12校)	28	(21.4)	0.525	31	(23.8)	0.193	78	(60.0)	0.979	36	(20.6)	0.002	84	(48.0)	0.900	90	(48.1)	0.080	90	(48.1)	0.080
	あり(18校)	74	(24.2)		58	(18.4)		178	(60.1)		78	(35.0)		108	(47.4)		125	(56.8)				
実施時間*	少(14校)	50	(24.3)	0.688	43	(20.7)	0.651	116	(62.0)	0.466	68	(36.2)	0.025	88	(44.9)	0.302	95	(53.7)	0.682	95	(53.7)	0.682
	多(14校)a	50	(22.6)		43	(18.9)		134	(58.5)		44	(25.3)		86	(50.3)		100	(51.5)				

下線はp<0.05

* 2校は未回答

a 昨年度の性教育実施時間が8時間(中央値)以上

表3 高校生の性意識と教員要因との関連 (各要因別にみた性意識の割合)

教員要因*	男子									女子												
	規範意識			性交意図			エイズ態度			規範意識			性交意図			エイズ態度						
	結増するまでしない	求められても性交しない		求められても性交しない		気をつける		結増するまでしない	求められても性交しない		求められても性交しない		気をつける		結増するまでしない	求められても性交しない		求められても性交しない		気をつける		
n	(%)	p	n	(%)	p	n	(%)	p	n	(%)	p	n	(%)	p	n	(%)	p	n	(%)	p		
現任教1年目	少(15校)	63	(28.6)	0.008	52	(23.3)	0.079	126	(61.8)	0.500	72	(30.3)	0.387	111	(46.4)	0.561	124	(54.4)	0.477	124	(54.4)	0.477
	多(13校)a	39	(18.0)		37	(16.7)		130	(58.6)		42	(26.3)		81	(49.4)		91	(50.8)				
性教育重要	少(12校)	36	(19.3)	0.080	41	(21.2)	0.566	116	(59.8)	0.908	47	(28.3)	0.902	91	(54.8)	0.016	82	(44.8)	0.003	82	(44.8)	0.003
	多(16校)b	66	(26.4)		48	(19.0)		140	(60.3)		67	(28.9)		101	(42.6)		133	(59.4)				
全職員で指導	少(12校)	34	(19.5)	0.127	41	(22.9)	0.209	103	(57.5)	0.360	38	(20.5)	0.001	98	(52.4)	0.075	102	(53.1)	0.909	102	(53.1)	0.909
	多(16校)c	68	(25.9)		48	(18.0)		153	(61.9)		76	(35.7)		94	(43.5)		113	(52.6)				
研修会参加	少(16校)	72	(27.3)	0.016	52	(19.3)	0.663	154	(61.8)	0.381	75	(31.1)	0.176	113	(46.1)	0.447	125	(53.4)	0.780	125	(53.4)	0.780
	多(12校)d	30	(17.3)		37	(21.0)		102	(57.6)		39	(24.8)		79	(50.0)		90	(52.0)				
家庭で教える	少(11校)	51	(27.4)	0.083	40	(21.1)	0.632	101	(60.5)	0.896	57	(33.5)	0.063	84	(48.8)	0.679	75	(47.5)	0.085	75	(47.5)	0.085
	多(17校)e	51	(20.3)		49	(19.2)		155	(59.8)		57	(25.0)		108	(46.8)		140	(56.2)				
昨年自分で実践	少(13校)	54	(27.8)	0.047	47	(23.5)	0.095	106	(59.6)	0.846	71	(32.7)	0.049	109	(48.9)	0.580	107	(50.7)	0.375	107	(50.7)	0.375
	多(15校)f	48	(19.8)		42	(17.1)		150	(60.5)		43	(23.8)		83	(46.1)		108	(55.1)				

下線はp<0.05

* 2校の教員が未回答

a 現任教1年目の教員割合が35.3%以上

b 性教育はとても重要と思う教員割合が81.3%以上

c 性教育は全職員で指導と思う教員割合が64.4%以上

d 研修会に参加した教員割合が14.7%以上

e 性について家庭で教えるべきと思う教員割合が89.2%以上

f 昨年自分で実践した教員割合が24.1%以上

高校生の性意識と教員要因との関連について表3に示した。男子の場合、現任教1年目の教員割合が少なく、昨年研修会に参加した教員割合が少なく、昨年度性教育を自分で実施した教員割合が少ない学校に属する生徒ほど有意に規範意識が高いことが示された。女子の場合、性教育は全職員で指導にあたりと捉えている教員割合が多く、昨年度性教育を自分で実施した教員割合が少ない学校に属する生徒は有意に規範意識が高かった。また、性教育はとても重要と思う教員割合が多い学校の生徒はエイズに気をつける者の割合が多かったが、逆に、求められても性交しない意図を持つ者が少

なかった。

表4には、表1から表3の中で各性意識と有意な関連を示した要因を多変量解析に同時投入して算出した調整オッズ比と95%信頼区間を示している。男子の規範意識には自己肯定感と飲酒経験が独立して関連していた。性交意図とエイズ態度については単変量解析と同様の結果を示し、それぞれ飲酒経験、家の居心地と飲酒経験が関連していた。女子の規範意識には家で話す頻度、飲酒経験、全職員で指導にあたりと捉えている教員割合が多い学校に属していることが独立して関連していた。性交意図には家で話す頻度のみが関連を示した。

表4 変数選択された項目と性意識との関連（多重ロジスティック回帰分析）

		男子			女子			
		規範意識		性交意図	規範意識		性交意図	エイズ態度
		結婚するまでしない	求められても性交しない	エイズ態度	結婚するまでしない	求められても性交しない	エイズ態度	
OR	(95%CI)	OR	(95%CI)	OR	(95%CI)	OR	(95%CI)	
個人的要因	両親							
	同居 その他							1.7 (1.1 - 2.7) 1.0
家の居心地	楽しい			1.8 (1.2 - 2.7)		1.4 (0.8 - 2.6)	1.0 (0.6 - 1.6)	1.6 (1.0 - 2.4)
	楽しくない・どちらとも			1.0		1.0	1.0	1.0
家で話す	よく	1.5 (0.8 - 2.9)			1.9 (1.1 - 3.3)	2.0 (1.3 - 3.2)		
	時々・あまり・話さない	1.0			1.0	1.0		
自己肯定	好き	3.3 (1.9 - 5.6)			1.5 (0.7 - 3.0)			
	嫌い・どちらとも	1.0			1.0			
出会い系サイト	利用しない					2.7 (0.9 - 8.2)		
	利用した					1.0		
飲酒経験	飲まない	2.2 (1.3 - 3.6)	2.7 (1.7 - 4.3)	0.5 (0.3 - 0.7)	2.5 (1.5 - 4.3)	1.4 (0.9 - 2.2)	1.0 (0.7 - 1.6)	
	飲んだ	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	
学校要因	研修会				1.1 (0.6 - 2.2)			
	なし(15校) あり(15校)				1.0			
外部講師	なし(12校) あり(18校)				0.7 (0.4 - 1.3)			
					1.0			
実施時間*	少(14校) 多(14校)#				1.3 (0.7 - 2.2)			
					1.0			
教員要因*	現任教1年目	1.3 (0.8 - 2.1)						
	少(15校) 多(13校)a	1.0						
性教育重要	少(12校) 多(16校)b					1.5 (0.9 - 2.2)	0.6 (0.4 - 1.0)	
						1.0	1.0	
全職員で指導	少(12校) 多(16校)c				0.6 (0.3 - 1.0)			
					1.0			
研修会参加	少(16校) 多(12校)d	1.4 (0.8 - 2.3)						
		1.0						
昨年自分で実践	少(13校) 多(15校)f	1.2 (0.7 - 2.0)			1.8 (0.9 - 3.3)			
		1.0			1.0			

OR 他の項目を調整したオッズ比。太字は $p<0.05$ (95%CI) 95%信頼区間

* 2校は未回答

昨年度の性教育実施時間が8時間(中央値)以上

a 現任教1年目の教員割合が35.3%以上

b 性教育はとても重要と思う教員割合が81.3%以上

c 性教育は全職員で指導と思う教員割合が64.4%以上

d 研修会に参加した教員割合が14.7%以上

f 昨年自分で実践した教員割合が24.1%以上

エイズ態度には両親と同居、家の居心地、性教育はとても重要と思う教員割合が多い学校に属していることが独立して関連していた。

考察

性意識と個人的要因との関連性について

家の居心地や家でのお話頻度などの親子関係や家庭環境に関する項目が性意識と関連していたことが特徴的である。総じてみると、両親と同居している者、家が楽しいと感じている者、家でよく話す者のいずれも、一貫して、規範意識が高く、性交意図がなく、エイズに気をつける者が多い傾向

にあった。多変量解析の結果、特に女子の家庭環境項目が多く性の意識と関連していたことから、望ましい親子関係や家庭環境は女子生徒の性意識を高める上できわめて重要な要因になると思われる。一方、家庭環境要因が望ましくない生徒は、望ましい性意識を持つ者が少なく、将来、危険な性行動をとる可能性も高くなると考えられることから、彼らはハイリスク群として捉えて、個別に指導したり、地域と連携してサポートしたりすることが必要な対策となるのではないだろうか。

飲酒や喫煙、薬物使用あるいは非行などの問題行動をとる者は同時に危険な性行動もとりやすく、これらの行動が個人に集積して起こる問題行動症

候群 (problem behavior syndrome) を呈しやすいたことが指摘されている^{8) 9)}。本調査では、飲酒経験や喫煙経験のない者は、規範意識が高く、性交意図を示さない傾向にあった。これらの性意識は性行動を予測することから、問題行動の集積性を示す先行研究を間接的に支持していたといえる。特に飲酒経験は他の要因の影響を調整した後も多くの性意識項目と強い関連を示していたことから、高校生の性意識を高めるためには飲酒防止についても同時に考慮する必要がある。しかし、男子の場合、飲酒経験のある者はない者に比べて2倍エイズに気をつけているという興味ある知見を示した。飲酒者に性交経験者が多いことが報告されているが⁹⁾、本調査でも飲酒経験のある者は性交を経験しやすいと推測され、そして性交経験のある者は現実的にエイズ感染にも気をつけていると考えられる。

男女とも自己肯定感と規範意識との間に有意な関連が認められ、自己肯定感がある者ほど規範意識が高い傾向にあった。全体的にみても、自己肯定感のある者は望ましい性意識を持つ傾向にあり妥当な結果を示したが、多変量解析の結果、男子にのみ有意な関連がみられ、本調査で扱った変数の中で最も強い関連性を示した (OR=3.3)。したがって、男子の規範意識を高める上で、自己肯定感は重要な要因になると思われる。しかし、自己肯定感を含む概念であるセルフエスティームは性行動と弱い関連しか示さないという報告があることから⁵⁾、学校における指導では、自己肯定感やセルフエスティームといった感情を高めることによって、直接、性行動を変容させるというよりも、自己肯定感を向上させることにより、性意識を望ましい方向に導き、その結果、間接的に性行動を変容させるという方策が現実的であると考えられる。

相談友達の有無、携帯メールの使用は、いずれの性意識とも有意な関連がみられなかった。また、出会い系サイトの利用は、女子の性交意図にのみ関連がみられたが、多変量解析ではその関連性は消失していた。

性意識と学校要因との関連性について

校内研修会を実施したり、外部講師が指導したりした学校の子供生徒の規範意識が高いことは、

それぞれの取り組みの成果であると考えたいが、性教育の実施時間と性意識の関連については、期待に反した傾向を示した。学校の取り組み方法によって生徒の性意識に及ぼす影響は異なる可能性が考えられるが、この場合、規範意識の低い生徒が多く所属する学校が性教育の実施時間をより多くして対応した可能性も否めない。いずれにせよ、他の要因の影響を取り除いた後に、これら学校要因の影響は消失していたことから、個々の生徒の性意識に学校要因が及ぼす影響はあまり明確でないことが示唆された。

性意識と教員要因との関連性について

性教育がとても重要と思う教員が多い学校、研修会に参加する教員が多い学校、自分で性教育を実践する教員が多い学校というのは、性教育への取り組みに積極的な学校であると考えられるが、単変量解析の結果では、これらの学校に属する生徒ほど性意識が低く望ましくないことが示された。教員が性教育に熱心に取り組むほど、生徒の性意識が悪化するということはまったくないとは言いきれず、指導する内容や方法によっては逆効果になる可能性もあることが考えられるが、通常、学習指導要領の範囲内で指導が行われていることや、高校生という認知・発達レベルを考えると、そのような因果関係は考えにくい。学校要因と同様に、性意識の低い生徒が多い学校だからこそ、性教育に取り組む教員割合が多くなったと考えるのが妥当なのではないだろうか。多変量解析の結果では、女子にのみ、その妥当な関連性が残り、全職員で指導にあたると思えている教員が多い学校に属している生徒は少ない学校の生徒に比べて、結婚するまで性交しないとする意識が1.7倍高く、また、性教育がとても重要と思う教員が多い学校に属している生徒は少ない学校の生徒に比べて、エイズに気をつける者が1.7倍多かった。しかし、本調査からは因果関係には言及できないので、このことについては今後、縦断研究によって明らかにする必要がある。また、本分析の限界として、教員調査の回収率が低いことが挙げられる。対象校の教員の4割強が回答しておらず、これらの中には性教育に対して消極的な者が潜在的に多く含まれる可能性も否めない。したがって、教員要因の実

態を正確に捉えておらず、その影響を過小評価しているのかもしれない。

多変量解析の結果から結論すると、男子の性意識には自己肯定感と飲酒経験といった個人的要因が強く関連しており、女子の性意識には親子関係や家庭環境といった個人的要因が独立して関連していることが示された。したがって、これらの個人的要因は高校生の性意識を高める際の重要な要因になるとともに、性別に考慮する必要があることが示唆された。また、学校の取り組み状況を反映すると考えられる学校要因や教員要因については、男子では影響がみられず、女子の場合、教員要因に若干の影響がみられたが、個々の生徒の性意識に一貫して影響を及ぼしているかは明確ではなく、このような集団レベルの要因は個人レベルの要因よりも影響が弱いことが示唆された。

本研究で用いたデータは平成18年度文部科学省委嘱「性教育の実践調査研究事業」で得られたものの一部である。記して謝意を表する。

文献

- 1) 厚生労働省エイズ動向委員会. 平成17年エイズ発生動向年報. 厚生労働省 2006
- 2) 厚生労働省感染症発生動向調査. 平成16年感染症発生動向調査. 厚生労働省 2006
- 3) 厚生労働省政策統括官付政策評価官室. 平成17年度政策評価実績評価書. 厚生労働省. 2006年8月. (<http://www.mhlw.go.jp/wp/seisaku/jigyoku/05jisseki/6-7-1.html>)
- 4) 文部科学省. 学校における性教育の考え方, 進め方. ぎょうせい 1999
- 5) Buhi ER, Goodson P. Predictors of adolescent sexual behavior and intention: a theory-guided systematic review. *J Adolesc Health* 2007;40(1):4-21.
- 6) 東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会. 児童・生徒の性. 学校図書 2005
- 7) 群馬県教育委員会. 性教育に関する調査研究事業 性及び性教育に関する意識調査結果報告. 2006
- 8) Jessor R. Risk behavior in adolescence: a psychosocial framework for understanding and action. *J Adolesc Health* 1991;12:597-605.
- 9) Takakura M, Nagayama T, Sakihara S, Willcox C. Patterns of health risk behaviors among Japanese high school students. *J Sch Health*. 2001;71(1):23-29.